

Person of the Month

誰もが、様々な場所で経験した3.11。毎回色々な「この人！」をクローズアップし、3.11後の生き方を紹介します。

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を受け、北海道は公営住宅や団地への大々的な被災者受け入れを表明。二〇一一年6月中旬には札幌市厚別区にある雇用促進住宅桜台宿舎に用意された二百戸がほぼ埋まり、様々な思いを胸に故郷を後にした方々が入居されました。今回は、その桜台宿舎で自治組織「桜会」の代表を務められている六戸隆子さんにお話を伺いました。

地震・津波・原発

六戸さんは福島県伊達市の出身。東京で就職後、しばらくしてから結婚を機に故郷へ戻り、3・11を迎えました。「とにかく大きな地震でした。勤務中だった六戸さんは会社から帰宅するよう言われ、先ずは情報を得ようとしてラジオを付けたそうです。地震の衝撃も凄まじかったのですが、間もなく津波警報が飛び込んできました。そこで私が危惧したのは原発でした。」

六戸さんが高校生の頃、福島第二原発3号機において、原子炉再循環ポンプ内部の回転翼溶接部が壊れ、炉心に多量の金属片等が流出するという事故が発生。危機感を持った六戸さんは原発の是非を考えるチラシ配布を手伝った。如何に私たちの境遇が理解されなかったのかを思い知る結果となりました。

現在も自主避難者コミュニティの代表として桜台宿舎の方々と対話を深め情報収集と発信を継続的に行われていますが、様々な問題に直面していると言います。

「原発事故から丸四年がたち、いよいよ健康被害が増えるのではないかと懸念しています。国や県、東電には継続的な対策を要望しますが、除染作業ひとつとっても利権構造に巻き込まれてしまっています。また被災した人達相互には、賠償や自主避難を巡って妬みの感情が生まれています。」

震災と原発事故の傷跡がなら癒えていないことを国民全員が認識していくためには、政治に訴えることが重要と六戸さんは言います。政治は国民の生活のためのもの。政治に関心を持たないのは危険なことです。

私たち一人ひとりが六戸さんの声に耳を傾けること。それが如何に大切か、痛感させられた取材となりました。

取材 / Indy横山 撮影 / 小森学



ていたそうです。ちなみに福島第二原発の事故は一九八九年。その三年前にはチェルノブイリ事故が発生しています。高校生の六戸さんがチラシを手に近所を訪問した際、こんな返事が返ってきたこともありました。

放射性物質の影響を巡って

「この町は原発で潤っているんだ。どっつこもなるもんじゃない。」

それ以来、頭の片隅に残っていた原発への不安は、3・11で現実のものとなり、「福島第一原発周辺の放射線量が上昇している」と聞いたとき、「これは本当にただ事ではない事態になってしまった」と直感したそうです。そして電気が復旧し、テレビを付けた途端に目に飛び込んできたのは水素爆発

で原子炉建屋が吹き飛ぶ衝撃的な映像でした。

「夫は教師だったので、三月二六日に予定されていた高校の合格発表の取り止めや、小中学校の新年度授業開始を遅らせるよう進言しました。私は子どもたちを屋外で遊ばせたり、土に触れないよう学校や各家庭に必死で伝えました。」ところが六戸さんのこうした奮闘は思わぬ方向へ誘導されてしまいました。

県の要請で放射線健康リスク管理アドバイザーとなり、三月二二日の福島市を皮切りに、川俣、会津若松、二本松などで講演を行った山下俊一氏。「県民へ速やかな情報公開が必要」と訴える一方で、「放射性物質の健康への影響は極めて少ないから心配ない」と言い



となく行なっている。

そんな林田さんにとって「音がさね」を行なうのは特別なことではなく、音楽を生業とする人間として当たり前行動なのだと思った。それを日常の一部として軽やかに、楽しさに変えて実行しているのだ。「本当は林田健司」という名前を出したくなかったんです」という言葉の裏には、そんな彼の生き方が透けて見える。

「音がさね」で出来上がった曲「ほくらこのこの詩」を聴き、歌う時、一人一人が自分のできることを創り出し、毎日の生活でそれを実践していくきっかけにしていくこと。それが、林田さんがこのプロジェクトに込めた思いを受け取ることなのではないか。三・一一から4年、重ねるのは音だけではない。これまでも、これからも。

Better Music for Better Days



「本当は林田健司という名前を出したくなかったんです。」

イベント会場に向かう車の助手席で、林田さんはそう言った。二〇一三年11月に開催した「林田健司流 東日本大震災復興支援歌プロジェクト『みんなの音がさね』札幌編」。会場に集まった全員で歌詞を考え、楽器を弾き、歌を歌い、その場で録音し一曲に仕上げるイベント。音楽作りを楽しむことと被災地支援を結びつけた、林田さん発案のプロジェクトだ。

震災後すぐに福島に入った林田さん。悲嘆にくれる人を30分間その胸に抱いて、言葉ではなく体の暖かさで励ましたという。ガレキを片付けるおばちゃん「こんなもんね、泣いてやっただって笑ってやっただって同じなんだから、どうせなら笑ってやるさあ」という言葉に逆に励まされたとも話してくれた。

今でも機会を作って福島を訪れ、被災者に音楽を届け、心と体を被災地に寄り添わせている林田さん。彼はそれを、まるで道端に落ちていたゴミを片手で拾う時のように、何一つ気負うこ

みんなの音がさね

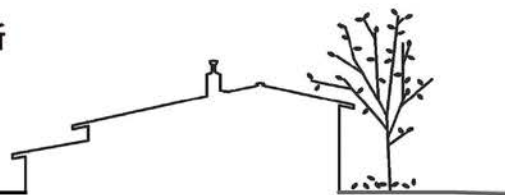


被災地被災地支援のための寄付2,000円に付き1枚差し上げます。(当CDは非売品です) 詳しくはBetter Days Projectまでお問合せください。

(株)フーム空間計画工房 一級建築士事務所

hu:mu

〒064-0944 札幌市中央区円山西町10丁目4-17
TEL. 011-613-5702 FAX. 011-613-5705



http://humu.jp
humu@humu.jp

想いを届ける活動

6月、お子さんとともに札幌へやって来た六戸さん。夏にはご主人も合流され、一家の札幌暮らしがスタートします。十二月には参議院から参考人招致を受け、国会議員の前で話す機会を得ました。そこで六戸さんが語ったのは自主避難者や福島を取り巻く現状と、心からの切なる要望でした。

「何人もの議員が泣いていました。想いが伝わったかなと思う反面、それま

